

伊東信宏著

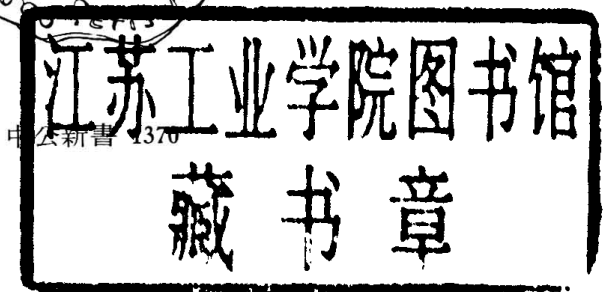
バルトーク

民謡を「発見」した辺境の作曲家



中公新書

1370



伊東信宏著

バルトーク

民謡を「発見」した辺境の作曲家

中央公論社刊

伊東信宏 (いとう・のぶひろ)

1960年(昭和35年)、京都に生まれる。
大阪大学文学部卒業。1990年、アリオン賞
音楽評論部門奨励賞受賞。1991年、大阪大
学大学院博士課程単位取得退学。ハンガリ
ー科学アカデミー音楽学研究所、リスト音
楽院に留学。現在、大阪教育大学助教授。
専攻、音楽学。

著書【小さな音風景】(分担執筆, 時事通信社)
【環境と音楽】(分担執筆, 東京書籍)

訳書【ハンガリー民謡】(バルトーク・B著, 共訳, 全音楽
譜)

【バルトークの室内楽曲】(J・カールパーティ著, 共
訳, 法政大学出版社)

バルトーク

中公新書 1370

©1997年

検印廃止

1997年7月15日印刷

1997年7月25日発行

著者 伊東信宏

発行者 笠松 巖

本文印刷 三晃印刷

カバー印刷 大熊整美堂

製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売部 03-3563-1431

編集部 03-3563-3666

振替 00120-4-34

◇定価はカバーに表示してあ
ります。

◇落丁本・乱丁本はお手数で
すが小社販売部宛にお送り
ください。送料小社負担に
てお取り替えいたします。

Printed in Japan ISBN4-12-101370-0 C1273

はじめに

はじめにお断わりしておきたいのだが、本書は作曲家バルトックの伝記ではない。もちろん彼の作品や作曲活動に言及することにはなるだろうが、それらは系統だつて扱われているわけではないし、楽曲の分析を試みたわけでもない。ここで目指しているのは、バルトックという音楽家の六十四年にわたる生涯を、民俗音楽の研究活動という側面から見直すことである。このような試みは、一見奇を衒とつたものに映るかもしれない。バルトックといえば、まずやはり作曲家として知られているのであつて、たしかに民俗音楽研究にも手を染めはしたかもしれないが、それはあくまで二次的、余技的なものだったのではないかと考へる人もいると思われからだ。事実、「民俗音楽学者としてのバルトック」というテーマについては、これまでさんざん語り尽くされてきたかにみえて実はせいぜい伝記のなかで一節が割かれる程度であり、これを主題に一冊の書物が書かれたことはない（ハンガリー本国ではわずかに先例がある）。しかし、本書がとりあえず目指すところは、まさしくこのような常識に疑問を投げかけることにある。これから見てゆく

ように、バルトーク本人にとって、その民俗音楽学上の業績は、演奏者、あるいは教師としての活動とは比べ物にならない比重を占めていたのであり、作曲家としての仕事をも凌ぐとは言えないまでも、少なくともそれと並ぶほどの重要な意味を持っていた。このことを強調するのは、決して彼の音楽作品を軽視しているからではなく、民俗音楽についてのバルトークの研究を知ることとむしろそれら音楽作品の理解がより深く、よ勁くなる^よと考えるからである。

しかし、これまでバルトークの民俗音楽学上の業績が素通りされてきたのは無理もないように思われる。というのも、彼の研究は概して極めてわかりにくく、扱い難いものであり、素朴に興味を抱いた程度ではなかなか手に負えないからである。彼の議論は、しばしばあまりにも細部に拘泥しすぎている、あるいは逆に論理に飛躍があつたりしてかなり慎重な読みを必要とする。また、主要著書の原語がハンガリー語であり、そこからの翻訳の際にさまざまな問題が生じたことも事態を複雑にしている。そして、戦後ハンガリーの複雑な政情のゆえに彼の研究の公刊が遅れ、死後半世紀を経てもまだその全貌は明らかになっていないという事情もあつた。つまり、バルトークによる民俗音楽理解については、これまでその研究に必要な前提がそもそも整っていなかったのである。

一方で、ロシヤ・アヴァンギャルドやチェコ構造主義の同時代現象として、バルトークの研究にある種の期待を抱く人もいたかもしれない。バルトークが民俗音楽研究にそれほど多くの時間

を費やしたのなら、その内容は極めて先鋭的なものだったのではないか、という期待を抱く人があっても不思議ではない。しかしながら、この期待はいざそれを本気で調べだすと、裏切られることになる。というのも、彼の仕事は一見、旧態依然たる分類学でしかないからである。学問については、バルトークは所詮シロウトでしかない、とあっさり見切りをつけることすらできそうである。筆者はそれでも、たしかにここにある種の知の形態を認めるし、そのゆえに本書のような企ても意味があると考えのだが、ただしそれは同時代の言語学や文芸学の著作のように、首尾一貫して体系化されているわけではなく、その「読み」には彼が置かれていた社会を文脈として理解する作業が必要となる。

かくして、バルトークの民俗音楽研究は敬して遠ざけられてきた。つまり、バルトークの著作は素朴な関心に対しては難解に過ぎ、知的すれっからしにはアナクロニスティックに映ったのである。だが、それにしても「バルトークと民俗音楽」という題目は、あまりに気軽に唱えられ過ぎてはいまいか、というのが筆者の正直な感想である。コンサートのたびに繰り返されるこの種の解説を読むたびに（それはたいして、自然派、民衆派といった安心できるレットルと等価である）、筆者はバルトークがこの仕事に傾けた危険で奇妙な情熱が、あっさり平板化され、無害化されてしまうことにうんざりしてきた。本書の一番大きな目的は、この「バルトークと民俗音楽」という決まり文句をもう一度新鮮なものとして感覚できるようにすることにある。すなわちバルト

クが実際に何を聴き、何を行ない、何を考えたか、について具体的なデータを提供すること、そしてそれを当時バルトークが生きていた社会の中で理解すること——ここで目指したのは、これらの諸点である。

それはしかし、いったい音楽史なのか、あるいは民俗音楽学前史としての学史的な研究なのか、と戸惑う向きもあるかと思う。ここで扱われているのが、バルトークの音楽作品それ自体ではなく、民俗音楽自体ですらなく、バルトークによる民俗音楽研究の実態だからである。このような書物は、音楽史の記述法としてはもちろん規範的とは言えまい。というのも、音楽史とは、まず第一に音楽作品を中心に据え、その自律的展開（作曲史上の問題の自己展開）を描くべきである、とされてきたからだ。これは音楽学（ないし音楽史学）というまだ若い学問が、一般の歴史学から独立してその自立性を強調しようとする場合には無理もないことだったし、またこの学問が最初に制度化されたドイツの音楽史を描く際にはある程度有効な主張だったとも考えられる。しかし、ハンガリーの音楽史について調べているうちに、このような方法には限界があるのでないかという気がしてならんようになってきた。周知のように、ハンガリーの歴史は、近代以降いつも西欧の圧力を受けてその影響のもとに展開してきており、そしてハンガリーの音楽史も、このような政治的・経済的・社会的圧力に抵抗しながら、あるいは時にはそれを利用して展開してきた。つまり、西欧を中心とし、ハンガリーを音楽史の周縁と位置づけようとする力の場がまず存

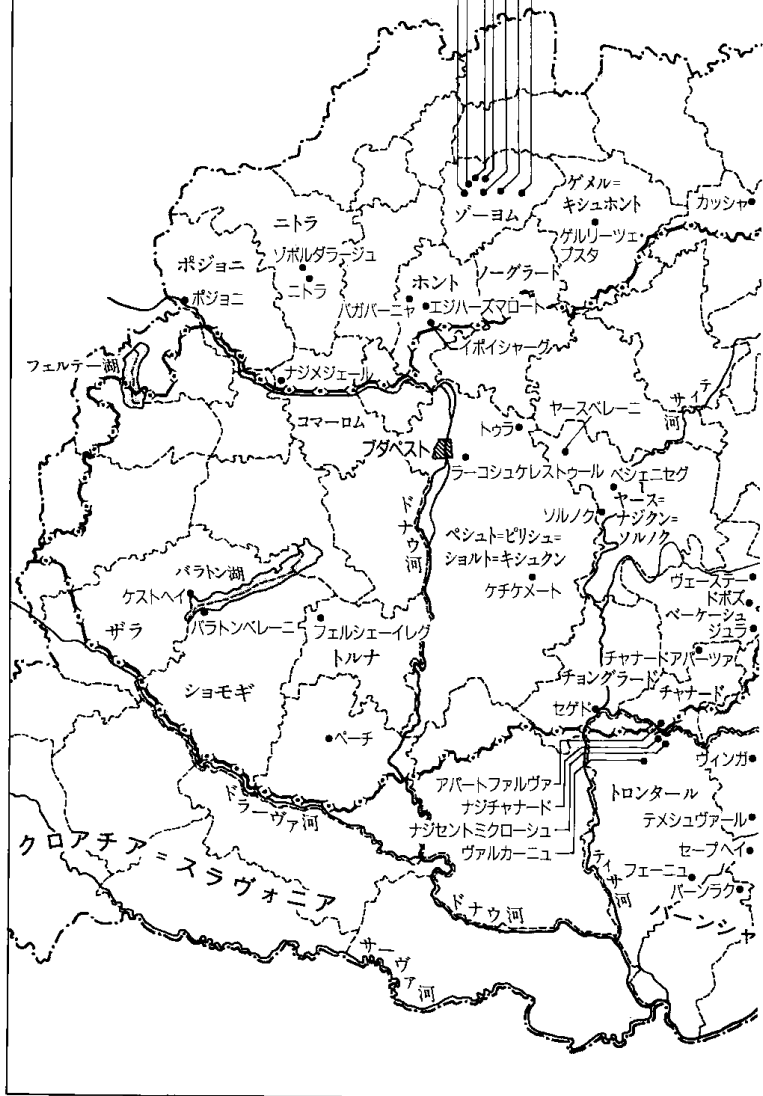
在し、ハンガリー文化はこのような場に対して働きかけねばならなかったのである。バルトークの民俗音楽研究という活動も、このような力学を無視しては語り得ない。あるいは逆に、彼の民俗音楽研究をつぶさに見ることは、そのような音楽史の力学を浮き彫りにするかもしれない。その意味で筆者は、これをやはり音楽史（それは比較音楽学・民族音楽学の成立もその中に含み込んでいるような広義の音楽史である）の書物として捉えていただきたいと考えている。

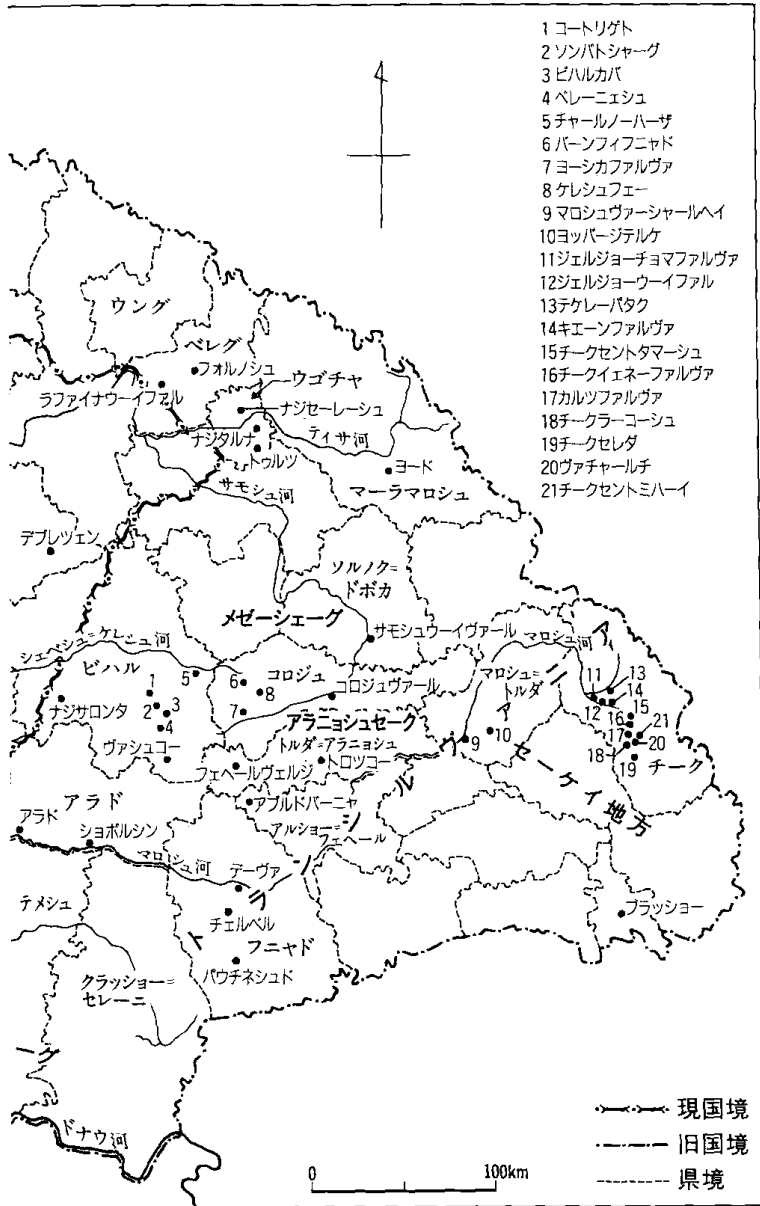
あらかじめ表記についていくつかお断わりしておく。まず、「民俗／民族」という二種類の漢字が頻出するが、本書では英語の *Folk* に相当するものを「民俗」、*nation* や *ethno.* にあたるものを「民族」と書き分けたつもりである。また人名のうち、ハンガリー人のものに限って、ハンガリー語の原則どおり姓・名（イニシャルを用いる場合は、姓・イニシャル）の順で記している。ただし、ハンガリー生まれでアメリカに帰化した人物などの場合はその都度説明を付した。また、第四章で頻出する「ジプシー」という語は、近年差別的であるとして避けられる傾向があるようだが、ここではそのような差別的視線をも含めた当時の「通念」自体を問題にしているので、あえて他の語に置き換えることはしなかった。最後に、地名の扱いについて。この書物に現れる旧ハンガリー王国内の町や村は、多くの場合ハンガリー語、ルーマニア語、スロヴァキア語、ドイツ語など複数の言語による呼び名を持っている（たとえば現スロヴァキア共和国の首都ブラティスラヴァは、ハンガリー語ではポジョニ、ドイツ語ではプレスブルクと呼ばれる）。これらすべてを挙げ

ているとあまりにも煩瑣になるので、本書ではバルトークが民俗音楽収集旅行を行なった今世紀初頭の版図に従って、ハンガリー語による呼び名を標準とし、主要な都市のみ現在の地名を併記することにした。もちろん、これは混乱を避けるためであって、領土的主張のゆえではない。

ハンガリー

- ヘーテル
- バドコーツ
- ペルハート
- ベステルツェバーニヤ
- ポーニク
- リベトバーニヤ
- フェクテパログ





- 1 コートリグト
- 2 ソンバトシャーグ
- 3 ビハルカバ
- 4 ベレーニエシュ
- 5 チャールノーハーザ
- 6 バーンフィフニャド
- 7 ヨーシカファルヴァ
- 8 ケレシュフェー
- 9 マロシュヴァーシャーレヘイ
- 10 ヨッバージテルゲ
- 11 ジェルジョーチョマファルヴァ
- 12 ジェルジョーウーイファル
- 13 テケレーパタク
- 14 キエンファルヴァ
- 15 チークセントタマーシュ
- 16 チークイェネーファルヴァ
- 17 カルツファルヴァ
- 18 チークラーコーシュ
- 19 チークセレダ
- 20 ヴァチャールチ
- 21 チークセントミハイ

———— 現国境
 - - - - - 旧国境
 - - - - - 県境

0 100km

目次

はじめに i

第一章 民謡の「発見」…………… 3

文化的独立? 十九世紀の「ハンガリー音楽」像

ハンガリー音楽におけるナシヨナリズムの時代 交響

詩《コシュート》の矛盾 中欧の音楽状況 ゲルリ

ーツェ・プスタで コダーイとの出会い

第二章 民俗音楽収集旅行の時代——一九〇六—一八年…………… 25

旅程 一九〇七年夏、トランシルヴァニアで 収集

の様子 仮説 ハンガリー音楽のヴォルガ河流域起

源説の帰結 アラブ・ビスクラ地方への調査旅行

採譜、録音、写真 タームラップ 採譜の極限

編曲、出版

第三章 民謡コレクション『ハンガリー民謡』を読む

——一九一九—一九二三年……………75

第一次世界大戦後のハンガリー 国外脱出の計画

右翼からの批判 「文化的優越」という発言 博物

図譜としての『ハンガリー民謡』 『ハンガリー民謡』

の分類法 A/B/Cという三分類の判断基準 分

類法の扱いにくさ 分類の意義 《舞踊組曲》

第四章 「ハンガリー音楽」ジプシー音楽」という

通念をめぐって——一九二〇年代……………113

「ハンガリー音楽」という通念 《ハンガリアン・ラブ

ソディール》の成立史 「ジプシー叙事詩」というコン

セプト 「リストに関する諸問題」 バルトークによ

るリスト批判の骨子 真のジプシー音楽とは？ ラ

ヴェル 《ツイガーマ》 パリ、プルニエール邸での晩

餐 イミテーションの美学 「まがいもの」のイミ

テーション ファリヤとの対比 バルトークの反応
バルトークの《ラプソディー》

第五章 晩年——一九三四—四五年……………

159

《ピアノ・ソナタ》第三章 科学アカデミーでの仕事
『ルーマニア民俗音楽』の分類 『ハンガリー民謡全集』における分類法の修正 コダーイのバルトーク批判 『ハンガリー民謡全集』出版までの経緯
移住の決意 出版 『南スラヴ民俗音楽』 アメリカでのバルトーク 死

あとがき

参考文献

204 193

バルトーク

第一章
民謡の「発見」



従兄弟ヴォイト・エルヴィンの水彩画